ティーチング・ポートフォリオ

西川　誠

（記入日：　令和　４年　３月　２５日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本史研究入門(1)（１年前期必修）　日本史概説(2)（２年前期必修）
日本史演習(3)（３年通年選択必修）　史資料演習（４年通年必修(複数開講)）
卒業論文（４年通年必修(複数開講)）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

①日本史学に関する基礎的知識を習得すること
②日本史学における課題を見つけ調査する能力を涵養すること
　それを一般的な調査検討能力に拡充すること
③収集した情報を基に思考し、まとめ、分かりやすく提示する能力を身につけること
④独断的観念体系に陥らない思考を身につけること

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

①については、学生の基礎的能力に合わせた教材を作成した。これまでの学生の反応を考えて、バージョンアップしている。日本史概説の授業評価は向上した。【日本史研究入門(1)・日本史概説(2)】（エビデンス１・４）
②の前半と③については、学生にレジメを作成させ、報告、ディスカッションを行わせた。卒業論文については、学生の学習態度もあり、調査検討にばらつきが生じた。【日本史演習(3)・史資料演習・特殊研究・卒業論文】（エビデンス２）
④については、卒業論文作成の際に指導した。【卒業論文】（エビデンス３）

４　成果（どうだったか：結果と評価）

①については、概ね学生の反応は良い。（エビデンス４）
②③については、学生の事前学修を丁寧にアドバイスしたので、調査はかなりでき、それを反映したレジメも良好なものであった。ディスカッションも

期待以上のものであった。④については、一面的な判断は避けられたと考える。

5　今後の目標（これからどうするか）

①については、毎年の改良を重ねていくとともに、リアクションペーパーの反応を反映させる。

②③については、事前学修の促しと、報告者への指導を重ねていく。

④については、今後も指摘していきたい。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1　各授業の配布レジメ・史料（非公開）

2　学生の作成したレジメ集（非公開）

なお日本史演習(3)で用いた教材は以下の通り。

・鈴木淳・西川誠・松沢裕作編著『史料を読み解く４　幕末・維新の政治と社会』（山川出版社・平成 19 年）

・『講座　日本歴史』近代各巻（岩波書店・平成 22 年）

3　ゼミ生５名の卒業論文（非公開、１点のみ学生研究室で在校生に限り公開）

4　リアクションペーパー（非公開）

授業評価アンケート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

戸澤純子

（2021年9月6日）

１　教育の責任（担当科目）　基礎ゼミナール（1年、前期、必修科目、2単位）、情報リテラシー（1年、前期、必修科目、2単位）、ライフ・プランニング（1年以上、前期、共通教育選択科目、2単位）など

２　理念（教育目標）

学ぶことは自分自身の現在の生活ばかりではなく、将来の活動にも影響を与える。加えて自分自身だけではなく、周囲の人たちにも大きな影響を与える。それは単に資格取得や就職などの直接的な活動に直結する以上に、重要な意味があることを大学生の時期に気づいてほしいと考えている。

大学時代に自ら積極的に学ぶ習慣を身につけ、問題に自ら気づき、主体的に問題解決を図る力を身につける機会を提供することを、どのような科目においても教育目標としている。

３　方法（実践の工夫）

2021年度前期には、感染拡大の状況に応じて、対面とオンラインのどちらかで授業を行うハイブリッド方式で行った。オンライン授業においては、主にマイクロソフトteams会議機能を使用して、リアルタイムの授業を行った。

例えば情報リテラシーにおいては、知識がないことで被害者に、場合によっては加害者にもなりかねないインターネット上の様々なトラブル事例を自習して、発表する機会を設けた。過去の事例を知ることで、現代においてインターネット上のトラブルは特別な人にだけ発生するのではなく、万人の問題であることを学んだ。加えて対面授業の機会を利用して、実際の機器を使用してOneDriveの使い方を学習した。OneDriveは便利なオンラインストレージであるが、ドライブや、フォルダやファイルの概念を十分に理解する必要があることから、この内容については対面授業で学ぶこととした。このように対面とオンラインとで、学ぶ内容を調整して学習効果があがる工夫を行った。

ライフ・プランニングにおいては、1）日本の現状に関する基礎的知識についてオンライン資料を配布して説明し、2）妊娠や出産に関する知識をYouTube動画も使用して学び、3）ライフステージに関する心理学理論をオンライン上で実際に体験して、自分の適性や関心領域を深く知る授業を行った。

４　成果（結果と評価）

対面授業だけを行っていた時期に、本学学生にOneDrive、teams、formsなどを使用させて授業を受け、課題提出させることは極めて困難であったと考えられる。本年度のように、オンラインと対面のハイブリッド方式、オンライン上での繰り返しの指導（エビデンス１）、teamsでのチャットのやり取り（エビデンス２）などが、大きな教育効果を発揮したと考えられる。さらに重要なのは、何といっても受講生の「これが使えなければ授業を受けられない、単位が取れない」という事情の上での真剣さによって、多くの受講生がマイクロソフトのソフトウェアを使いこなした。これは大変に大きな学習成果と考えらえる。

オンライン授業において、ほぼ毎回のように課題をオンライン上で提出でき（エビデンス３）、提出された課題の内容は対面授業の場合と同様に、十分に概念や事象を理解しての解答であった。

５　今後の目標

オンライン授業の良さも、対面授業の良さも両方あることから、今後の感染状況によるものの、今後も対面とオンラインの両方の授業形式を使用した授業が継続すると予測する。オンラインでは資料配布やteamsの会議機能などを利用して、知識の伝授はできる。ただしオンライン授業では、formsで回答させるといった一方的な解答を求めるばかりではなく、個々の学生の理解度や意見を現在以上に十分に査定する努力を必要とする。

対面授業は、教員と学生ばかりでなく、学生同士といった人間の関わりあいに優れた効果を発揮する。この機会に、プレゼンテーションやグループ学習など、人間同士の関わり合いを増やす学習形式を、これまで以上に取り入れる予定である。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１　授業発表資料、Microsoft　Teams での会議機能（非公開）

２　Microsoft　Teams でのチャット（非公開）

３　Microsoft　Forms による振り返りテスト（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

戸澤純子

（2022 年 2 月 17 日）

１　教育の責任（担当科目）　観光調査法（1 年、後期、必修選択科目、2 単位）、観光文化実践Ⅳ（2 年、後期、必修選択科目、2 単位）、観光心理学（1 年以上、後期、必修選択科目、2 単位）など

２　理念（教育目標）

学ぶことは自分自身の現在の生活ばかりではなく、将来の活動にも影響を与える。加えて自分自身だけではなく、周囲の人たちにも大きな影響を与える。それは単に資格取得や就職などの直接的な活動に直結する以上に、重要な意味があることを大学生の時期に気づいてほしいと考えている。

大学時代に自ら積極的に学ぶ習慣を身につけ、問題に自ら気づき、主体的に問題解決を図る力を身につける機会を提供することを、どのような科目においても教育目標としている。

３　方法（実践の工夫）と成果（結果と評価）

2021 年度後期には、感染拡大の状況に応じて、原則として対面授業を行った。感染状況によってはオンライン授業も行った。オンライン授業においては、マイクロソフト teams の会議機能を使用して、リアルタイムの授業を行った。

観光文化実践科目は、学外での学生の体験を重視する科目である。しかし本年度は大学の方針のもとに、積極的な学外学習を進めることは難しかった。そこで学外での観察からレポート提出という課題に代わって、学生自身のアイデアによる作品の制作を行った。この制作では手書きでも、動画でも自分のできる作品提出（エビデンス１）を求めた。その結果、筆者自身が考えつかないユニークな作品が多く提出された。本学の学生の中には、文章を苦手とする学生も少なくない。しかし動画や絵画作品であれば、独自性や優れたアイデアを提案できる学生が少なからずいたことは、発見であった。これをきっかけとして、今後はこれまでのレポート提出を求めるなどの文章中心の学習ばかりでなく、学生の適性をよく見極めて、動画や絵画などによる作品制作も行う予定である。

観光心理学においては、1）日本の観光行動の歴史について、2）観光行動に関連した心理学理論や心理学概念について、オンライン資料（エビデンス２）を授業前にチームスに配布してから、対面授業で学んだ。この授業において、授業前の資料配布の重要性に気づいた。試験難易度は例年と大きな変化はなかったにもかかわらず、受講生の多くの最終試験が高得点であった。このことは授業前の予習や、授業での内容の確認といった、実際には当たり前のことを、以前の形式の対面授業ではおろそかになっていたことに気づいた次第である。

４　今後の目標

対面授業だけではなく、オンライン授業だけでもない形式の授業を約 1 年間行ってきた。以前の対面授業は、事前の準備は丁寧に行っていたつもりでも、学生の授業内容の理解のためには、多くの点で不十分であることに気づくことができた。これからは授業前の資料配布、授業内容によっては文章ではなく作品の提出を求めることで、学生の学習意欲を高める工夫を行う。

５　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１　Microsoft　Teams での課題提出機能（非公開）

２　Microsoft　Teams での一般機能（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

柳川 悦子

（記入日:令和 3 年 9 月 25 日）

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「旅行事業論／旅行業論」（前期選択必修科目）、「観光マーケティング論／観光マーケティング」（前期選択必修科目）、「観光文化実践Ｘ」（前期選択必修科目）、「現代の社会」（前期選択必修科目）、「エアライン事業論」（後期選択必修科目）、「旅行業務取扱管理者講座（1)」（前期専門科目・国家資格取得）、「旅行業務取扱管理者講座（2)」（後期専門科目・国家資格取得）、「キャリア・プランニングⅠ」（後期選択必修科目）、「キャリア・プランニングⅣ⑵」（後期選択必修科目）、「観光文化入門演習」（2 年後期必修科目）、「観光文化専門演習（1)」（3 年前期必修科目）、「観光文化専門演習（2)」（3 年後期必修科目）、「卒業研究演習（通年)」（4 年必修科目）など。

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

- 学生自身が、観光産業という多様性に富んだ社会を理解し、コミュニケーション力や協調性といった可視化できない社会人基礎力を磨いていくことを目指している。
- 国家資格である「旅行業務取扱管理者」の合格者を一人でも多く輩出すること。
- 担当者が実務家教員として、航空会社の 広報・マーケティングの現場に長年勤務して培った観光に関する知識を活かし、観光の総論的知識や枠組み、関連業務のあり方について、学生が正確な知識を得て、きちんと理解できる事を目指している

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

－ 今年度前期も、一部の少人数の授業を除いて、ほとんどの授業がオンライン（遠隔授業）で行われたが、各自のネット環境を考慮しつつ、ほぼ毎回、双方向授業を行い、ひとり一人の学生の不安を取り除くよう、授業内容の理解度を確認しつつ、できるだけ身近に起こっている観光関連企業の事象を例にして指導を行った。

－「観光文化実践Ⅳ」では、コロナ禍ではあるが、感染対策を十分に行っている外資系ホテル 2 社、外資系航空会社の日本支社に、インターンシップとして数名の学生を派遣した。このような状況下において、学ぶことが多かった実習について、各自の振り返りを指導し、今後の学生生活や就活について、深く考察する機会も持つことができた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

― オンライン授業の場合は、ほぼすべての授業で課題を出し、学生はその課題を提出するだけでも、大変な作業だったと推察するが、逆にオンデマンドで、授業資料や授業

動画をTeamsの各チームに貼り付けたため、学生はわからなかったところを繰り返し見て、勉強する事ができたように思う。
－ 国家資格取得のための科目である「旅行業務取扱管理者講座」については、オンライン授業であっても、履修者をみていると、学生がそれぞれ自分から学ぶ姿勢を持つ学生が増えたように感じている。昨年9月に1名合格、今年も数名が受験し、合格の期待が高まっていることは喜ばしく思っている。

5 今後の目標（これからどうするか）
－ 今後の対面授業については、コロナの感染対策に充分に留意しながら、グループワークなどを中心に行い、まず、自分の頭で考えること、そして、他の学生の考えなどを知る事により、問題意識を持ち、多様性を重んじ、協調性を育む、というような学生の主体的な学びを促したい、と考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
成果を確認できるものには、次のものがあります。
・授業用パワーポイント資料（各講義科目では1回の授業で20枚～25枚程度の資料を配布しました）
・授業ごとにFormsや「課題」を利用して聴取した授業の感想等
・授業評価アンケート

以上

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化学科　氏名：江口智子

（記入日：2022 年 2 月 27 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

観光経営学（前期、選択必須科目、2 単位）、観光の情報デザイン（1）・(2)（前期・後期、選択必須科目、2 単位）、観光文化実践 V（前期、選択必須科目、2 単位）、観光文化専門演習（1）・(2)（前期・後期、必須科目、2 単位）　基礎ゼミナール（前期、必須科目、2 単位）、キャリア・プランニングⅢ（1）・(2)（前期・後期、選択必須科目、2 単位）キャリア・プランニングⅣ（1）（前期、選択必須科目、2 単位）、ホスピタリティ入門（後期、選択必須科目、2 単位）、リーダーシップ論（後期、選択必須科目、2 単位）、観光英語特講Ⅰ（後期、選択必須科目、2 単位）、プレゼミナール（後期、必須科目、2 単位）、観光文化入門演習（後期、必須科目、2 単位）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

・観光立国が志向されるなか、観光を学ぶ学生に対する社会からの期待や、その前提となる課題、問題が現在の社会にどのように存在しているのかを伝えたいと考えている。

・グローバル社会を自分らしく生き、個性と能力を発揮するために必要な学問的知識、実践的知識を習得し、品格を兼ね備えた人材を育成したいと考えている。レポート執筆やプレゼンテーション、ディスカッションを重ね、自分の考えを文章や言葉で伝えるスキルも身につけてもらいたい。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

今年度前期は、ほぼすべての授業で遠隔授業を行った。学生ひとりひとりの状況把握やコミュニケーションが可能な双方向型を実施した。講義科目では、講義は 60 分、残り 30 分は授業内課題を出すなどの時間配分や、有益な動画視聴を取り入れるなどし、学生が学修しやすい環境作りに務めた。授業内での PowerPoint 資料は事前に Teams にアップし、授業の録画も行うことで、学生がいつでも復習可能な環境を整備した。後期は、ほぼすべての授業で感染対策を行いつつ対面授業を実施した。前期に出来なかったディスカッションやグル

ープワークなどを積極的に取り入れることを心がけた。
実践型の授業において、観光文化実践 V（前期）では、予定していたホテル訪問がコロナ禍により中止となったが、ホテルの副総支配人にオンラインでホテル経営についてお話をいただくことによって、履修者がホテルの経営戦略を理解する機会を設けた。観光の情報デザイン（1）・(2)（前期・後期）では、いま注目されている観光情報の「動画」による提供スキルを身につけるべく、散歩動画の制作を行った。

４　成果（どうだったか：結果と評価）
ほとんどが遠隔授業であった前期科目は、提出されたレポート課題や最終試験結果から、学生は慣れない環境で大変であったと推察されるなかでも高い学修成果があったように感じている。後期科目は多くの学生が対面出席し、グループワークやディスカッションの機会を多く設けたり、ゲスト講師に登壇いただいたりと、発言や発表の場、コミュニケーションの場が増えることで、遠隔授業よりも意欲的に学修できた学生が少なからずいたと感じている。散歩動画の制作を行った観光の情報デザイン（1）・(2)（前期・後期）では、ほぼすべての学生が動画制作未経験であったにも関わらず、グループメンバーで協力してこちらの期待を大きく上回る動画が多く完成した。動画制作の経験が自信につながったという学生も多々おり、今後、様々な分野で動画によるコミュニケーション・PR が増えていく時代に、学生がそのスキルを修得したことは有益であったと考えている。

５　今後の目標（これからどうするか）
遠隔授業と対面授業の双方を経験したことにより、今後は互いの良い点を取り入れた授業を実施していきたいと考えている。対面授業でも Teams にて、授業内資料の事前配付、課題機能を活用し、学生の利便性向上をあげるとともに、グループディスカッションや画面上の原稿を読むだけではないプレゼンテーションを繰り返すことで、他者と協同し主体的に考え行動できる人材の育成に貢献していきたいと考えている。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
各授業の PowerPoint 資料（非公開）

Microsoft Teams の一般機能（非公開）
学生のレポート（非公開）
散歩動画（非公開）